

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年7月19日発行「補習校だより」第14号より抜粋

読点は、意味と音調の両面から判断して打つ。
書きながら読み返し、音調もよい文章にする。

読点（以下テン）をどこに打つかの「基準」は一応ありますが、文章を書いているならば、詳しく、正確に、効果的に表現しようという意識が働くものであり、さらに書き手の個性や口調も反映しますから、なかなか「基準」通りにはいきません。

例えば、「叙述の主題となる語のあと」もテンを打つところですが、一概にいけないことは次のような例を想定してみれば明らかです。a～dとも「叙述主題となる語」は、「梅の花は」です。

- a 梅の花は、早春になると、咲き始めます。
- b 梅の花は二月いっぱい咲き続けます。
- c 梅の花はきびしい寒さの中で、咲くのです。
- d 城の町全体を優雅な香りで包む梅の花は2月いっぱい咲き続けます。

aは、何が - ドウスルという文の組み立てが、なるほどテンが打たれていることによって明快に示されています。しかし、テンが打たれてないbが一読して内容が理解でき、音調の流れも何ら問題ないのですから、「叙述の主題となる語のあと」という「基準」は説得力をもちません。また、cのように「咲くのです」を強調するという主要な目標のために、そこまでをテンなしで続けるという場合もあります。dはこのままだでも理解に支障はありませんが、テンなしでは苦しく、文字通りどこかでひと息つきたいところで、打つとすれば「梅の花は、」とするのが適当でしょう。

つまり、「叙述の主題となる語のあと」というのは「基準」というよりも「目安」というのが妥当ということになります。「原因・結果を示す『ので・から』のあと」もテンを打つべきところですが、「基準」通りにはいきません。

- e なかなかバスが来なかったので、僕たちは歩くことにした。
- f 僕たちは、なかなかバスが来なかったので歩くことにした。

e・fとも、「……ので」と「僕たちは」を含んでいます。eは前者を優先し、fは後者を優先したものです。

こういうことをどのように判断するかといえば、書きながら 声に出して読み返す ことがいちばんです。音調をよくしていく過程は、ここまでに述べた なくてもよい言葉や部分は削る ことや、 係る言葉は受ける言葉の近くに置く ことを伴いますから、内容も整理されていくものです。

これも難しいとしたら、単純に《テンなしの部分は三十字を限度とする》とします。これは、私が小学校教科書の全部の文について調査した結果発見した法則で、小学生・中学生には無論使えますし、高校生・大学生の文章でも、特に長い語数の単語を含む文章でなければ使えます。